



「現役社長の講話Ⅱ」 「ベンチャービジネス論」開講

スーパー連携大学院コンソーシアム web ニュース
2016年1月21日

富山大学「現役社長の講話Ⅱ」

富山大学での「現役社長の講話Ⅱ」は、11月27日(金)～29日(日)に行われ、スーパー連携大学院プログラム受講生は、北見工業大学1名、大分大学2名、富山大学1名および富山大学受講生4名の計8名が受講した。

1日目は、(株)能作と立山科学工業(株)の工場見学を行った。(株)能作は鑄物の街高岡に大正5年に400年伝わる鑄造技術を受け継ぎ設立された。創業当初は仏具、茶道具などを中心に操業していたが、近年ではテーブルウェアやインテリア雑貨、建設金物、照明器具など現代にあわせた伝統工芸品に事業展開している。見学では、まず展示場の製品説明の後、真ちゅうの鑄造で鑄型に溶けた真ちゅうを流し込む作業、鑄型を壊し固まった真ちゅうを取り出す作業、その後の研磨作業や加工機による作業、原型となる木型のコレクション、そして出荷作業など、一連の作業を見学した。多品種小量、例え1つでも生産出荷するきめ細かな対応をしている。続いて、立山科学グループの見学を行った。立山科学グループは電子部品(抵抗器、温度センサ)、電子機器(無線機器、各種モジュール、計測機器)、自動精算設備、精密加工部品など事業規模は小さいながらも宇宙向けの認定品など非常に高品質の製品を生み出し、近年はFA事業で国内有数の規模の生産を行っている。これら最近の事業展開と着手している新規事業展開について紹介いただいた後、製造装置アSEMBル工程と、デバイス試作ラインを見学した。



(株)能作での鑄造作業



(株)立山科学工業にて



カナヤママシンリー(株) 金山宏明氏



(株)能作 能作克治氏

2 日目は、カナヤママシンリー(株)金山宏明氏、(株)能作 能作克治氏、(株)立山科学デバイステクノロジー 石黒栄一氏から講話をいただいた。金山宏明氏は「付加価値創造と会社経営」と題し、真空機器事業、カナヤマの強い点となる電子ビーム溶接、福祉機器、産学連携、付加価値創造と経営理念について紹介された。特に、真空リークと装置製造後のクレームのない電子ビームによるAI 溶接技術や、中国を生産拠点として一から立ち上げてきた座り心地の良い車椅子や歩行補助具などには、ユーザーの要求しているポイントを掴んだものづくりの技術が感じられた。能作克治氏からは、能作の行う卸売りを使わない販売チャネル、世界での展示と展開、そしてスズによる



(株)立山科学デバイステクノロジー 石黒栄一氏

る新しい市場の開拓、試作品、研究開発について紹介いただいた。失敗談も交えながら、世界の場所でお客さんが必要としている要求と、それに対して試作してきた曲がるスズ製品と独自性、デザイン性に対する一貫したこだわりと成長する会社の姿には感銘を受けた。石黒栄一氏からは立山科学グループの概要、事業内容、グループの特徴、そして世界のなかの日本、私たちと必要性について紹介いただいた。様々なポイントを掴みながら開発されてきた高品質・高付加価値の製品、精密加工技術と無借金かつ現金決済からなる身の丈経営など、他社にはまねの出来ない強い会社の体質が有るものと感じた。

学生からの質問やレポートからは、人のためを思った製品の大切さ、社長になったとたんに感じる責任感とリーダーとしての必要性、自分自身を知ることの大切さ、海外展開に対する反響の違い、コミュニケーション、諦めずに続けることの大切さ、企業イメージの変化、グローバル展開での考え方など、様々な質問と感想が出てきた。

以上、社長さんの強い意志と意思を受け継ぐことが出来た良い機会となった。

(岡田裕之 富山大学)

大分大学「ベンチャービジネス論」

2015年度の「ベンチャービジネス論」が、2016年1月8日(金)～11日(月)の4日間に亘って、ホルトホール大分(大分市金池南1-5-1、www.horutohall-oita.jp)の講義室において開催された。講師は、野村證券(株)金融公共公益法人部 主任研究員 小澤育夫氏と野村證券(株)法人開発部 シニア・アドバイザー 蟹江康夫氏が担当した。

この授業は今年で5年目を迎え、ここ最近20名近い受講生の受講があり、「ベンチャービジネス論」が開講されてから5年間の受講生の推移は表1に示す。初年度は後学期になってからの急な開講であったこともあり、大分地区の他大学の学生を加えた形での授業で、大分大学旦野原キャンパスと大分市活性化プラザで行われた。このとき、大分地区の受講生はほとんどが女性で留学生も多く受講した。受講生からは積極的な質問・意見が出され、意欲の高い留学生の様子がスーパー連携大学院プログラム受講生により刺激を与えたように感じられた。スーパー連携大学院プログラムの受講生は、M1が主体であることもあり、例年5名前後になっているが、2013年にはM1～D1に亘る9名の受講生がいたこともあり、とても活発な意見交換があった。これは高学年の受講生の鋭い意見に触発されてM1の学生からも多くの考えや意見がだされ、活発な議論になったことによるものである。同学年の受講生のみの場合よりも、異なる学年が混在している場合の方がこのような実践的授業では好ましい面があるといえる。また、この授業が実践的な内容であることが関係すると思われるが、受講生にとっては新鮮で有意義な授業であり、受講生からの評価も高い内容となっている。

今年は、スーパー連携大学院プログラム受講生6名(北見工業大学1名、秋田県立大学3名、大分大学2名)および大分大学受講生15名の計21名が受講した。この授業では、会社の仕組み、財務、経営、起業についての理解、

考え方などについて、具体的な例を交えながら丁寧な説明が行われ、演習によってより理解が深められるように工夫されている。本年度の4日間の授業の内容は次のとおり。

【1日目】 ガイダンス、産学連携とベンチャー企業への期待に関して

【2日目】 ベンチャー企業の基礎知識、企業会計・経営分析・財務諸表分析、競争と戦略、マクロ経済

【3日目】 資金ニーズの発生と資金調達、ベンチャー企業の成功と失敗、事業計画立案

【4日目】 事業計画発表・意見交換

表1 ベンチャービジネス論の受講生の推移

年度	受講者数	北見工業	室蘭工業	電気通信	富山	大分	秋田県立	大分 ¹⁾
		スーパー連携大学院プログラム生						
2011	13名	1名		3名				9名 ²⁾
2012	10名				4名		1名	5名
2013	13名			2名	4名	2名	1名	4名
2014	20名			3名	3名	2名		12名
2015	21名	1名				2名	3名	15名

1) 大分大学大学院の一般受講生

2) 立命館アジア太平洋大学学部生(別府市)。開設初年度の2011年度のみの開講決定時期の関係で連携大学以外からの受講生を受け入れた。



産学連携・ベンチャー企業への期待について講義(蟹江講師)



当日発行の日本経済新聞を使用した講義(小澤講師)

授業は、ベンチャー企業に関する内容だけではなく、企業における事業、企業に対する見方・考え方、経済動向と企業の経営や経営者に関することなど企業に関する全般的内容に関して講述された。大学では基本的に学ぶことのない企業の財務に関する内容など実践的な内容が丁寧に解説され、起業することを意識している学生だけではなく、企業で働くエンジニアになる場合を含め非常に参考になる授業であった。1日目は、授業についての概要と授業の進め方に関するガイダンス、産学連携の重要性およびベンチャー企業に関しての現状と期待に関して説明があった。2日目は日経新聞を用いて、ビジネス的観点での記事の見方などについて説明があったあと、企業の会計や財務諸表分析など大学ではあまり触れることがない内容について取り組んだ。2日目の夜には講師を囲んでの懇親会も開催され、受講生と講師15名が参加し、意見交換を含め、日頃は異なる環境にいる学生たちにとってはさまざまなことを感じ取れるよい機会となった。3日目の午後は、所属の異なる学生どうしが意見交換できるように4グループに分かれて、事業計画の立案作業を行った。どのグループでも活発な意見交換が行われ、それをまとめる作業となった。例年以上にスムーズに事業計画をまとめる作業が進み、とても有益な演習の時間となった。4日目には、作成した事業計画の概要をグループごとに発表し、意見交換を行った。

講義終了後、受講生からは、今まで思っていた企業に対するイメージも変わり、起業ということに興味をもてるようになったとの声が聞かれた。4日間の授業を通じて、具体的な活動とコスト、目的・目標についての考え方などを習得し、ある程度ビジネスの全体的見方ができるようになったものを感じられる。今後、必要に応じビジネス的視点での理解や解析を反映させた現実的行動ができるものと期待される。

(氏家誠司 大分大学)



事業計画立案時の様子



事業計画発表風景



授業終了後の集合写真(ホルトホール大分 中央階段にて)